

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第 59 回

ハミに関する競馬用語について

講師

松山康久さん
元JRA所属調教師



案内人：辻谷秋人
text by Akihito Tsujiya

前々号、前号に続いて、松山康久元調教師にお話を伺う。今月号ではハミに関する競馬用語について教えていただく。

騎手は頭絡や手綱を通じてハミを操作し、馬に指示を伝達する。また馬が自らの意思を、ハミを通して伝えてくることもある。このようにハミは、人と馬との約束事を成立させる重要な馬具である。

レース後の談話でよく聞く言葉に「ハミを取ってくれなかった」とか「自分からハミを取って走った」といったものがある。このことから、「ハミを取る／取らない」というふたつの状態があることがわかる。つまり、ハミはいつも同じ状態にはないということだ。

「ハミを取る」とか「ハミをかける」というのはハミが奥歯の前に収まり、騎乗者が手綱を通じて能動的な推進気勢を感じられる状態になることをいう。しかし、スタートからゴールまでずっとそのようなではなく、ある段階までハミは、騎手が手綱を通して拳で軽くコンタクトをとった状態にある。この感覚は微妙なもので馬ごとにも違い、手応えとしては様々なのがある。そして騎手は、ここからが

勝負、というところでハミをかけ、全身の扶助を使ってゴーサインをする。

「ハミをかけるのは通常、騎手の指示です。騎手がハミをかけたようにしたタイミングで、馬がそれを読んだかのように自らハミを取り、良い結果に繋がるケースもあります。また完全に馬主導で騎手のコントロール下にならない場合を『ひっかかった』、『ハミを噛んだ』などと言います」

「ハミを噛む」場合には、馬の身体や口に異変があり不調のときや、過度な興奮で精神的に不安定なとき(イレ込み)、レース中の物見など突発的な刺激によって不測の事態が起きたとき、騎乗者の技術不足や操作ミス、馬の学習・調教不足や癖などが原因で起きるといいます。

「そうしたときにはあえて馬群や他馬の直後に馬を入れ、ハミの抜き差しをして、馬の行く気を牽制します。これを『ハミを抜く』とも言います。また馬によっては騎手が道中のハミ受けを楽にする目的で単走状態をつくるため、あえて逃げの戦法や最後方からレースをする場合があります」

ハミがどんな状態にあるかは、馬がレースを走る上でひじょうに重要なことになるのだ。

「舌を縛ってみる」ことの 厩舎サイドの目論見とは？

ハミが口腔内の定位置に収まって、騎手の指示が的確に伝わる馬を「ハミ受けがいい」といいますが、

「ハミ受けの思わしくない、騎手の指示が伝わりにくい馬を『口がかたい』と表現することがあります」と松山さん。とても雰囲気のある比喩表現だが、比喩ではない場合もあるのだという。

「口角や口腔内に発生した傷が原因でかさぶたやマメができてしまうことがあります。そうすると、その部分が硬結して鈍感になり指示が伝わりにくくなってしまいます」

こういった状態を「カタクチ」というのだが、口が硬くなるという意味で「硬口」と書いたり、どちらか一方の口角が硬結して鈍感になるので「片口」と書いたりするそう。

S.Suzuki



チャンピオンズCを制したサウンドトゥルーのゴール時の写真。同馬もこのレースで、舌を縛ってレースに臨んでいた

ハミ絡みでもうひとつ厄介なのは、走りながら舌を動かしてハミで遊ぶ馬がいることだ。とくに問題なのは舌がハミを越す場合で、通常舌の上にあるハミが、遊んでいるうちに舌下にいくことがある。「その状態で指示を出しても的確に伝わらなせんし、ハミが舌下、舌の根元に当たって、馬も痛い。それを防ぐために、ハミで遊ぶ癖のある馬はあらかじめ舌を下顎と、主として綿製の包帯で縛ったりします」

